

大沼法龍著

昭和北嶽異鈔

敬行寺發行

# はしがき

歎異鈔に唯円房が「竊に愚案を廻らして粗古今を勘ふるに先師の口伝の真信に異なるを歎き、後学の疑惑あらんことを思ふ。幸に有縁の知識に依らずんば争でか易行の一門に入る事を得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ること勿れ。仍て故親鸞聖人の御物語の趣き、耳の底に留る所、聊かこれを註す、偏に同心行者の不審を散ぜんが為なり云々」、自分の聴聞した信仰と異なることを歎いて作られたのが、歎異鈔である。

真宗の生活信条に「み仏の教に従い、正しい道を聞きわけて、真のみ法を弘めます」とみな言っているけれども、機ごと機ごとで程度が異っているのだから、誰のが真やら仮やらわからない。各自が、自分のが正しいのだと信じてはいるけれども、合点しているにすぎない。比較してみれば、真物と贋物の区別がつく、信仰も教化に調

子をあわしているのだから、嘘物ではないけれども贗物が多い。化土巻に「然るに濁世の群萌、穢悪の含識、乃し九十五種の邪道を出でて、半満権実の法門に入るといへども、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て希なり、疑なる者は甚だ以て多く、虚なる者は甚だ以て滋し」と聖道門から浄土門に趣入するのでさえも、真実なるものは稀有であるのに、浄土門に転入して勢至菩薩の化身たる法然上人の教化を蒙りながら、真実なるものは三百八十余人の中わずかに二三人にすぎないとすれば、浄土真宗に流れを汲むもので信楽開発したものが、殆んどいないとしなければならぬ。

歎異鈔に「おほよそ聖教には、真実権仮ともにあひまじはりさふらふなり、権をすて、実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ聖人の御本意にてはさふらへ、かまへてく、聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ」とあるが、教化する人が真実権仮の分別がつかないのだから、聴聞している人に真仮の分際のはずがない。いま法龍が浄土真宗の教化さるる方々の信仰を眺めたとき、聖人の思召しに契わぬ、

真意を喪失してはいないか、お聖教を離れて脱線した教化をしてはおられないか、それはそのまま、彌陀釈迦二尊の願意、教意に悖ってはいないか、それでは真実報土の往生は空しく、微塵劫を超過しても仏の願力には歸し難く、大信海には入り難しで、仏凡一体の境地に立つことはおぼつかないのではないかと、不敏を顧みず、非難攻撃は覚悟のうえで「昭和の歎異鈔」を著述して反省を促しているのであります。

(1) 浄土真宗では読経、儀式に偏重して、実地の求道を軽視してはいませんか。僧侶が色衣を着て葬式をすれば、極楽往生をさしてあげるように自惚れ、遺族のものもそれで浄土往生をしたものと安心しているのは、自他ともに間違いではありませんか。聖人の真意は、歎異鈔に「親鸞は父母孝養のためと一遍にても念仏まをしたること未だ候はず」と、改邪鈔には「某親鸞閉眼せば賀茂河にいらてうほにあたうべし」とありませんが、いま真宗では実地の求道は指導せず、流れを汲むものはすべて信後のものと見做して、読経、儀式が真宗の全部のように誤認してはいませんか。

(2) 聖人の特徴の中の特徴は、真仮の分際を説くことにありますが、念仏を称えながら仮を仮と知らないのだから一体になった真を知らない、真に入ってこそ今まで仮に滞留していたことを知らされて、信前信後の水際が説けるのです。「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」と仰せられたのであります。それに信仰の求道のうえで「三不三信誨慰勸」とあるのに、三不と三信の信前信後の水際を説く人もなければ、「専雑執心判淺深、報化二土正弁立」と専雑の得失を説いてあるのに、真仮を語る人が一人とないとすれば、明らかに聖人の真意を見失っているのではありませんか。

(3) 聖人は実地の求道をされて「遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり」とあるが、真宗の道俗は聖人のお言葉の真似をしているだけで、実地の求道をしないから仏智満入した体験がない、後生は一人凌ぎですから、お言葉の真似では平等の証果は得られないと思います。

(4) 聖人は法然上人の膝元で、たのむ一念の時、立ちどころに他力摂生の旨趣を受得したと書いてありますが、一念をはっきり語るものがない。聖人が「一念といふは信樂開發の時尅の極促を頭はし、廣大難思の慶心を彰す」といわれたのは、実時でも仮時でもない、開發したときの味である。溺れていたものなら、助かったという自覚がある、後生の苦になつたものなら、開發したという體驗がある。後生の一大事になつていないものが、読書して了解しているのだから、いつとはなしに獲信したといふのは、話がわかつたゞけ、調熟と摂取の分際がわからないのだから、摂取されてはいません。

(5) 聖人は実地の求道をなさつたから、信巻に「遇淨信を獲ば是の心顛倒せず、是の心虚偽ならず、是を以て極悪深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり」と。文類聚鈔に「常没の凡夫人、願力の廻向に縁りて、真実の功德を聞き、無上の信心を獲れば、即ち大慶喜を得、不退転地を獲るなり」と、到るところに慶喜心が

出ています。第二十願の行人のところには「真に知んぬ、専修にして雑心なる者は大慶喜心を得ず」と、不如実の信の人には、慶喜心はないと誡めてあります。しかし真宗では、歎異鈔の第九節を、金科玉条のように死守して喜べないのを手柄のように言っています、あれは肉体の死を引き寄せてみれば、いくら三蔵二十九種の結構なお浄土でも、踊躍歎喜で飛んでゆきたいことはないという意味で、信仰とは話しが違うのです。

(6) 聖人は信樂開發が根本で、不体失往生、心命終、平生業成が据りであるのに、真宗の道俗はこの世ではどうもなれない、死んだらお助けと体失往生、身命終の小坂の善恵房の味方をしているではありませんか。

(7) 聖人は第十八願の成就文の聞即信の一念で、無量永劫の解決がつく、唯信独達の法門を発揮しておらるるのに、真宗では十劫の昔に助かっていることを喜べと、十劫秘事の異安心を鼓吹しているのは、聖人の真意を知らないのではありませんか。

(8) 聖人はあれだけ難信の法と説いておらるるのに、真宗の道俗は誰一人として語るものもないのは実地の求道がなく、実地の体験がないから語り得ないのでではないでしょうか。難信易行が宗の根基で、易信易行の宗旨はありません。

(9) 聖人は三三の法門を定規として、三願転入を実地に体験して入信の道程を教えおらるるのに、これを無視して真宗に流れを汲めば、みな第十八願の他力不思議を受得したと自惚れさしては、聖人の信仰と雲泥の差のあることに気がつかないのでしょうか。

(10) 聖人は「五劫思惟の願をよくく案ずれば親鸞一人がためなりけり」とあるのを真宗の道俗は親鸞一人がためなりけりと仰せられて、私の身替りをしてくださいましたと平気で嘘をついている。後生は一人しのぎです。聖人はこの道を通れば親子が一体になれると、三願転入で誘導しておらるるのに実地の求道をする人が一人もいないのだから、信樂開発した人が一人もいないのです。



静かに考えてみれば、法竜ほどの果報者は三千世界に二人といないでしょう。真宗の殻を出てみれば十方法界がわがものであり、宇宙の真理と一体になってみれば神通自在、無碍自在の境地で応化を示すことができるのである。真宗には智者も学者も輩出してゐるけれども、ああ言えば異安心、こう言わねばお聖教に抵触すると、小さい凡智の神経を尖らして蝸牛角上の鬭争をつづけているけれども、それは御教化を敷衍しをしてゐるにすぎない、不思議の仏智と一体になつていないから、如来聖人の真意を読破することができない。だから新興宗教の荒波に卷込まれてゐる真宗の御門徒を、傍観するのみであつて、救済することができない。信仰の悩みを開化するのでなく、絢爛たる儀式に眼を向けさすことに腐心しているから、儀式が終れば淋しいから低級の物慾の宗教に狂わされてゆくのであります。これは誰の責任か。宗教が発展し、信仰が燃え立つのも、萎靡沈滞するものも、まったく為政者の責任であります。真理に順応する者は榮え、真理に背馳するものは滅ぶのが自然の道理であります。

浄土真宗から追放され、圈外に追い出された法竜が「昭和の歎異抄」を書くなんて、世の中は矛盾、逆事だが、これが的中しているかいないかは、第三者の正しい判断を待つよりほかに道はないと思います。門内のものは、腹いせに悪口をいうと取るるかも知れないが、そんなちっぽけな見方は微塵もない、圈外にいるからこそ自由に批判することができるので、門内においては長い物に巻かれよ、体験を語ることもできない不自由さで、気迫もなければ発展もない、ただ他力無力で安逸を貪り、死後の夢を見ているに過ぎない。不思議の仏智に眼覚め批判をし、鉄槌を加えても、無明の酒に酔いつぶれているものには悪口としか聞こえないのだから、どうせ彌勒の出世を待つまでは流転をつづけなければなりません。

重ねて申しあげます。この世で晴れて満足できなければ、いくら素直に喜んでいても、浄土真宗の平生業成ではありませんよ。